

【研究資料】

# 近代日本におけるバスケットボール研究の発展史 —学問体系把握に向けた一試論—

谷釜尋徳<sup>1)</sup>

Development of basketball research in early modern Japan

Hironori Tanigama<sup>1)</sup>

## Abstract

To help understand the academic framework of basketball research in Japan, this paper examines the development of basketball research in early modern Japan. The results can be summarized as follows:

1. In the Meiji period, Jinzo Naruse brought women's basketball to Japan from America. Basketball research at that time was limited to teaching materials for the women's sport.
2. Entering the Taisho period, basketball was adopted as a women's sport in school, and research on teaching materials continued. With the visit to Japan of F. H. Brown, the Japanese people had their first real encounter with basketball. Scientific sports research took root, and the groundwork was laid for more active research on basketball in the future.
3. At the end of Taisho period, basketball had caught on in Japan, and when the first all-Japan tournament was held, many specialized books on basketball were published. Articles on basketball-appearing in sports journals founded at that time-began by introducing the sport, explaining rules, publishing competition results, and providing commentary on games, but before long, research in other areas came to the fore, such as technique/tactics, response to game rules, refereeing, and ethics. As research on sports facilities progressed, basketball was taken up in that context.
4. When the Japan Basketball Association was established, there was a body of basketball research centered on Sang-Beck Lee. When the journal of the Japan Basketball Association (Rokyu) was founded, physical education principles and medical research were the focus, but before long studies shifted to game analysis to understand basketball in quantitative terms. Tactical research was also incorporated due to the influence of Jack Gardner on the national teacher training course. Furthermore, due to the journal Rokyu Kenkyu edited by Yukio Matsumoto, the latest information on basketball in America was brought in more quickly.
5. After participation in the Berlin Olympics, Japanese basketball strengthened its relationship with medical research. Research on tactics and studies using statistical data continued to progress, and there was more active research on teaching fundamentals. However, with the outbreak of the Sino-Japanese War, sports in Japan turned to improving physical fitness of the citizenry, and basketball research continued to stagnate, except for research on facilities/equipment connected with national policy, and submissions to basketball

---

1) 東洋大学法学部  
Faculty of Law, Toyo University

journals switched primarily to the issue of conserving resources under the circumstances.

Through the above stages, basketball research in early modern Japan branched into various subfields, in response to changing academic trends, growth of sports, and the social background. This created the foundation for today.

Key words : basketball research, Basketball science, academic history, sport history

キーワード：バスケットボール研究, バスケットボール学, 学問史, スポーツ史

## 1. 問題の所在

平成26 (2014) 年12月, 日本バスケットボール学会が設立された。これによって, 「バスケットボール」に興味関心を寄せる日本の研究者たちが, 専門諸学の枠を越えて一同に会する場が生まれたのである。

今後は, バスケットボールをテーマとした多様な視点からの個別研究が, 学会の知的資源として蓄積されていくことが期待される。しかしその一方で, 総論的な把握の仕方にも関心が払われるべきである。従来, 日本のバスケットボール研究は多様に分化発展してきたが, それらを串刺しにする統合的な理論の構築が検討の俎上に乗せられたことはなかった。若干飛躍して述べれば, スポーツ史・スポーツ哲学・バイオメカニクス・スポーツ心理学・運動生理学などといった「専門諸学」別ではなく, バスケットボールという「種目」別に仕切りを設けた場合, 果たして「バスケットボール学」<sup>注1)</sup>なるものが成立し得るのか, し得るとすればそれはどのような学問なのか, 活発な議論が展開されねばならない。

バスケットボール研究が学問<sup>注2)</sup>としての体裁を整えるためには, バスケットボールを対象とした研究のパースペクティブが見通せていなければならない。しかし, これまで, バスケットボール研究にまつわる学問体系が整理されたことはなかった。

立花は学問体系を知る手法のひとつとして, 関連分野の「学問史」の把握をあげている。学問の成り立ち(=学問史)を紐解くことが, 当該学問の現状の姿そのもの(=学問体系)を知ることにつながるというのである<sup>1)</sup>。これは, 福井が歴史学全般について「過去を問うことは, じつはその根において現在を問うことにつながっているのである。」<sup>2)</sup>と指摘したことと軌を一にしている。

先行研究によって, 戦後のバスケットボール研究の動向は取り上げられてきたが<sup>3-5)</sup>, 学問史的な視点から見れば, 日本にバスケットボールなるものが渡来してからしばらくの間, 当時の有識者たちが当該運動競

技をどのように研究してきたのか, その成り立ちの解明が求められるところである。かつて, スポーツの科学的な研究について「分化と総合」が問題にされたことがあったが<sup>6)</sup>, 日本のバスケットボール研究が「総合」的な見通しを得るためには, まずは当該研究分野が多様に「分化」していった過程をスポーツ科学<sup>注3)</sup>の学問史<sup>7-14)</sup>上に位置付けながら捉えることが当を得た手法であると考え。そのためには, 例えば「バスケットボールの技術指導の研究概史」や「バスケットボールに関する生理学的研究の学説史」などといった個別の専門研究分野に分け入っていくよりも, バスケットボール研究全般を巨視的に見渡す総合的な学問史がまずもって素描されるべきであろう<sup>注4)</sup>。

そこで本稿では, 日本におけるバスケットボール研究の学問体系を把握する試みの一環として, 近代日本のバスケットボールにまつわる研究が何を対象としてどのように行われてきたのかを時系列で検討することにしたい。したがって, 本稿は近代日本の「バスケットボール研究」の歴史を素描するものであって, 現代になって取り組まれた「バスケットボール史研究」の足跡を振り返ろうとするものではない。

ところで, 本稿が意図する近代日本のバスケットボールの「研究」とは, 今日でいうところの科学的な手続きに基づいた学術論文を必ずしも意味するものではない。世界的に見ても, スポーツ科学の研究が数々の専門諸学をとまなう総合科学として発展していくのは1970年代以降だといわれているので<sup>15)</sup>, 戦前にいくらバスケットボールを対象とした研究がなされていても, そこに今日に比肩し得る学術的な水準を期待すべきではないためである。ゆえに, 論拠となる基本史料として, 当時の専門書や論文のみならずスポーツ全般ないしバスケットボールの専門誌に投じられた雑誌記事まで広く取り扱うこととした。

検討のための時代区分として, 本稿では近代日本のバスケットボール史を象徴する出来事を基準に, 次の5つを画期とした。すなわち, ①成瀬仁蔵を先駆者に女子競技としてバスケットボールを受容した時代

(1894～1912年)、②女子バスケットボールが学校教材に採用されると同時にBrownの来日によって現行競技に連なる本格的なバスケットボールが伝来した時代(1913～1920年)、③日本人のバスケットボール熱が高まり全日本選手権が開催されはじめた時代(1921～1929年)、④大日本バスケットボール協会が設立され日本のバスケットボール界が国際化への足掛かりを築いた時代(1930～1935年)、⑤オリンピックに初参加を果たしたものの戦火に飲み込まれていった時代(1936～1944年)、である。

## 2. 1894～1912年のバスケットボール研究

### —女子競技としてのバスケットボールの受容—

Naismithが考案したバスケットボールを日本にはじめて伝えたのは大森兵蔵である<sup>16-18)</sup>。明治41(1908)年に東京神田のYMCAで会員に教授したのが最初で、慶應義塾大学や日本女子大学にも指導に出向いていたという<sup>19)</sup>。アメリカ留学時の大森は、明治38(1905)年より国際YMCAトレーニングスクールに在学し、バスケットボールを含む各種のスポーツ実技や運動生理学・測定評価・運動処方・衛生学・健康診断法・体育史・体育哲学・体育経営管理・文献研究法などを学び、当時としては最先端の知識や技能に接触した経験を持つ<sup>20, 21)</sup>。したがって、彼は多様な視点からバスケットボール研究に邁進するだけの素養を備えた人物であった可能性がある。しかし、彼がバスケットボールに対して行った研究の足跡は、文献等では窺い知ることはいできない。

一方、日本におけるバスケットボールの移入は、女子競技として早々に行われた。日本で最初の女子バスケットボールの紹介者は成瀬仁蔵である<sup>22)</sup>。成瀬がアメリカの女子大学からバスケットボールを持ち帰り、明治27(1894)年に梅花女学校校長となって同校の女子学生に「球籠遊戯」を指導したことをもって嚆矢とする。明治34(1901)年、成瀬は日本女子大学を設立し、第1回運動会で彼が独自に考案した「日本式バスケットボール」を披露している。しかし、当時の女子競技としてのバスケットボールは、コートを横に三等分する「ディビジョンライン」を引き、各人のプレイをそれぞれの区域内に制限するなど、女子の運動服(和装)にも配慮して現行よりも運動量が抑制された競技であった<sup>23)</sup>。

このように、Naismith考案の競技とは趣を異にするとはいえ、時系列で見れば大森に先立って成瀬がバスケットボールなるものを日本に紹介したことにな

る<sup>25)</sup>。したがって、成瀬による教材研究<sup>26)</sup>は、日本における最初期のバスケットボール研究であったといえよう。

間もなくして、成瀬に続く女子バスケットボールの教材研究の試みが現れる。小野泉太郎の「毬籠」<sup>24)</sup>、佐竹郭公の「女学生とバスケットボール」<sup>25)</sup>、日本体育会の『新撰遊戯法』<sup>26)</sup>、白井規矩郎の「Basket ball」<sup>27)</sup>および『体操と遊戯の時間』<sup>28)</sup>、松浦政泰の「女子遊戯バスケット、ボール(籠球戯)」<sup>29)</sup>などがその好例である。そこには、当時の日本の女子教育に適うバスケットボールを考案すべく、特に規則面での試行錯誤が垣間見える。

ほかにも、バスケットボールについて取り扱った初期の書籍として、川井和磨編集の『実験新体操遊技』<sup>30)</sup>、佐々木亀太郎・高橋忠次郎の『競争遊戯最新運動法』<sup>31)</sup>、高橋忠次郎・松浦政泰の『家庭遊戯法』<sup>32)</sup>、坪井玄道・可見徳の『小学校運動遊戯』<sup>33)</sup>、晴光館編集部による『現代娯楽全集』<sup>34)</sup>、上原鹿之助編集の『実験ボール遊技三十種』<sup>35)</sup>、渡辺誠之の『最新ボール遊戯法』<sup>36)</sup>などの教科教育のテキストに類する文献をあげることができる。しかし、いずれも項目の一つとして成瀬の系譜に連なる簡易的な女子用のバスケットボールを競技規則を中心に紹介したに過ぎない。このうち、『実験ボール遊技三十種』には、2チームに分かれて1個のボールを争奪するゲームと合わせて、2個のボールを準備して各々の定められたゴールに入れる早さを競うゲームが紹介されており、当時の女子バスケットボールに複数のバリエーションがあったことが窺える。また、『最新ボール遊戯法』には、ゲームの紹介のみならず女子バスケットボールの沿革や指導法にも僅かながら言及されている点は注目に値する。

明治37(1904)年には、本邦初のバスケットボールの単行書『籠球競技』<sup>37)</sup>が刊行される。著者は女子高等師範学校教師の高橋忠次郎であった。本書の序文に「今左に記述せんとする方法は数年間実地に経験したるものにして而も各種学校の現時の要求に應ぜんことを期せり」<sup>38)</sup>とあるように、ここに取り上げられた競技とは女子高等師範学校の実践事例であって、Naismith考案のバスケットボールは紹介されていない。

以降、大正期に至るまでは、日本のバスケットボールは女子競技として普及していく。当時の新聞紙面には「バスケットボールは各女學校に普及せぬ、(中略)此の遊技は運動としては遙かにテニスなどよりも有益で興味も多い、そして多人数(双方合して十六人)が同時に遊ぶ事の出来る遊技であるから實益と趣味では遙かにテニス等に優つて居る」<sup>39)</sup>との記事が掲



載され、学校教材としての有効性が認知されていたことがわかる。

明治期のスポーツ界は「指導者養成のほうにのみ努力が集中され、体育は体操の技術や遊戯の方法を教える所謂実技的色彩が強かったので、研究のほうが余り進まなかった」<sup>40)</sup>と評されているが、バスケットボールについては女子競技としての教材研究に終始していた時代であったと見なすことができよう。

### 3. 1913～1920年のバスケットボール研究

#### —バスケットボール競技の学校教材への採用と本格的な伝来—

大正2(1913)年、我が国初の「学校体操教授要目」が公布されるが、その「競争ヲ主トスル遊戯」の中にバスケットボールが採用されている<sup>41)</sup>。しかし、時勢を意識した『体操教授要目に準拠したる新定遊戯』<sup>42)</sup>『最新小学校遊戯解説』<sup>43)</sup>などの文献に登場するバスケットボールは、現行競技とは異なるいわば「玉入れ」の様相を呈するものであった。「学校体操教授要目」に採用されたバスケットボールとは、成瀬に由来する女子バスケットボールやそれを簡易化した教材を念頭に置いていたのである。

「学校体操教授要目」の公布と時を同じくして、大正2(1913)年にアメリカ人のBrownが来日し、神戸・東京・京都・横浜のYMCAでバスケットボールを指導した。ここに、それまでの女子競技としてではなく、現行競技に連なる本格的なバスケットボールが日本に伝えられることになった<sup>44) 45)</sup>。

大正6(1917)年には、極東選手権大会が東京芝浦で開催されることになり、日本バスケットボール界ははじめての国際大会参加を経験する。同年、極東体育協会が編集した『バスケット、ボール規定』<sup>46)</sup>が佐藤金一の訳で出版された。この頃になると、女子競技あるいは簡易的なゲームではなく、書物においてバスケットボールが比較的正しく伝えられるようになった。平本直次の『オリンピック競技法』<sup>47)</sup>においては、技術的な記述こそ見られないものの、コート の 図面とともに競技規則が詳細に解説されている。

国民に欧米のスポーツが普及するに連れて、スポーツの科学的研究も解剖学や生理学の分野を中心に僅かながら試みられるようになった。例えば、大正5(1916)年刊行の吉田章信の『運動生理学』<sup>48)</sup>は、実験や調査を用いた初期の研究として注目すべきものがある。また、バスケットボールを対象としたものではないが、指導法として先駆的な研究も登場する。野口源

三郎の『オリンピック競技の実際』<sup>49)</sup>などがこれに該当する。

### 4. 1921～1929年のバスケットボール研究 —全日本選手権の開催—

1920年代に入ると、日本人のスポーツ熱はいよいよ高まりを見せはじめる。すると、日本のスポーツ科学の中で「明治以来、最も研究の進んだ分野」<sup>50)</sup>であるスポーツ医学がまず台頭する。その内訳は、体力測定、発育発達、運動生理、運動生化学、疲労、衛生学、スポーツ外傷、女子スポーツなどに細分化し、関連学会において積極的に研究発表が行われるようになった<sup>51)</sup>。ただし、当時のスポーツ医学の研究対象に、バスケットボールがどの程度含まれていたのかは定かではない。

大正13(1924)年、国立体育研究所が設立された。この研究所は、解剖・生理・衛生・心理・教育・体操・遊戯・競技・運動医事相談の部門からなり、各部門に専門的な研究者を配置した総合的な研究機関である<sup>52)</sup>。開設当初より遊戯部門の中で「球技」が取り扱われ、バスケットボールもこの範疇に含まれていた。昭和2(1927)年発行の『体育研究所概要』という冊子には、研究所内の設備として「籠球ゴール(Basket-Goal)」があげられており、バスケットボールを対象とした講習会事業の実施報告も散見される<sup>53)</sup>。したがって、盛んであったか否かはともかく、国立体育研究所の設立によって日本のバスケットボール研究が公的機関において実施される道が拓かれたといえよう。

遡って大正10(1921)年、第1回全日本選手権が開催される。Brownの来日から数年が経過し、日本の各地に本格的なバスケットボール競技が普及していった頃である。

当時、バスケットボールを冠した単行書といえば、『女子バスケットボール規定』<sup>54)</sup>『バスケットボール規定 1923年改定』<sup>55)</sup>など、概ね規則書の類に限られていた。

大正13(1924)年、この状況に変化の兆しがあらわれる。藤山快隆によって、待望のバスケットボールの専門書『バスケットボール』<sup>56)</sup>が上梓されたからである。その記述内容は、競技規則の解説、ポジションごとの役割、技術面の記述やその練習法に至るまで幅広くカバーしている。とりわけ、シュートについてはバックボードを使用する際の入射角・反射角の問題にまで踏み込んで詳細に論じられ、かつ合理的にシュートに至るためのフォーメーションも数パターン解説されるなど、当時としては高水準のバスケットボールの

専門書であった<sup>77)</sup>。Wardrawら<sup>57)</sup>の文献をはじめアメリカの専門書に依拠する部分が随所に見られ、当時の最先端のバスケットボール事情を紹介した点でも本書の果たした役割は大きい。この類の書籍の刊行は、Brownの来日から約10年が経過し、日本人の間に本格的なバスケットボール競技が着実に根を下ろしていった状況を反映しているといえよう。

これ以降、荒木直範の『最新バスケットボール術』<sup>58)</sup>、鈴木精一の『バスケットボール』<sup>59)</sup>、三橋義雄の『バスケットボール』<sup>60)</sup>『最も要領を得たるバスケットボール段階的指導法と最新規則の解説』<sup>61)</sup>、外山慎作の『バスケットボール法大要』<sup>62)</sup>、鈴木重武の『籠球コーチ』<sup>63)</sup>、バスケットボール研究会の『籠球必携』<sup>64)</sup>、小瀬峰洋の『籠球競技』<sup>65)</sup>などが相次いで刊行される。いずれも、丹念に技術・戦術面や指導法の解説がなされた専門書であった。なかでも秀逸だったのは、安川伊三の『籠球競技法』<sup>66)</sup>である。本書におけるシュート技術の解説は、同時期の専門書と比べて質量ともに群を抜いており、ゴール付近のシュート技術に関してはそれまでの両手ではなく片手のリリース（片手短距離投射）を推奨した点でも新規性が見られる。また、あらゆる状況に対処し得る攻防の戦術が詳述され、さらには審判法についても一定の紙幅が割かれていた。

ところで、1920年代にはスポーツの専門雑誌が次々と創刊されるが、その中にはバスケットボールに関する記事が散見される。大正14（1925）年頃までは、バスケットボールを競技として紹介する記事<sup>67-79)</sup>、規則の解説<sup>80-82)</sup>、大会の観戦記<sup>83-88)</sup>が目立つが、大正15（1926）年以降は鈴木重武の「防御法の研究」<sup>89-91)</sup>や元原利一の「バスケットボールアウトオブバウンズプレイ」<sup>92)</sup>「平均配置からのティップオフ・プレイ」<sup>93)</sup>、安川伊三の「バスケット・シューティング」<sup>94-96)</sup>といった技術・戦術的な研究成果が紙面を賑わすようになる。また、李想白の「ドリブルの制限について」<sup>97, 98)</sup>「籠球審判の心得について」<sup>99, 100)</sup>、安川伊三の「バスケットボール審判法」<sup>101-103)</sup>など競技規則や審判法への関心も顕著に示されている。やがて、長田博翻訳の「バスケットボール誌上コーチ」<sup>104-110)</sup>、加治千三朗の「籠球の律動的指導に就いて」<sup>111, 112)</sup>、中島海の「籠球基本練習の指導」<sup>113)</sup>など、指導法にも目が向けられるようになり、倫理的側面からも李想白の「籠球に於けるスポーツマンシップ」<sup>114)</sup>などが発表されるに至った。鈴木重武の5回におよぶ連載「攻撃システムの研究」<sup>115-119)</sup>は、練習法にまで踏み込んだ当時を代表する戦術研究である。

この頃、前述の国立体育研究所においてもバスケット

ボールに幾分関係する研究が行われるようになった。その一つが、佐々木等の「ボールの内圧に就て」<sup>120)</sup>である。

昭和2（1927）年頃になるとスポーツの施設・設備に関する研究が進展する。文部省編集の『運動競技場要覧』<sup>121)</sup>、相川要一の『運動遊戯設備』<sup>122)</sup>、進藤孝三の『理想の体育設備と用具設計並に其の解説』<sup>123)</sup>といった研究書には、バスケットボールの項目が設けられている。多くの場合、当時のバスケットボールは屋外で実施されていたが<sup>124)</sup>、運動場の整備やコート上の区画の注意点が詳らかにされた。この種の研究は、後に安田弘嗣の『運動の施設経営』<sup>125)</sup>、文大屋霊城の『計画・設計・施工公園及運動場』<sup>126)</sup>、文部省編集の『現代体育の施設と管理』<sup>127)</sup>、早川良吉の「体育館の計画指針」<sup>128)</sup>などに引き継がれていく。

なお、1920年代末葉には、スポーツ全般に関する心理学的な研究<sup>129, 130)</sup>が専門誌に寄稿されるようになった。

## 5. 1930～1935年のバスケットボール研究 —大日本バスケットボール協会の設立—

昭和5（1930）年、大日本バスケットボール協会が設立される。ここに、日本のバスケットボール界は、国内を統括し、なおかつ海外との窓口となる組織的基盤を手に入れた。

同年、戦前のバスケットボール研究を代表する専門書が上梓される。李想白が著した『指導籠球の理論と実際』<sup>131)</sup>である。本書は、当時深刻な指導者不足であった日本のバスケットボール界に寄与すべく、「技術に対する正しい認識」を示す意図で出版された背景があるという<sup>132)</sup>。619頁から成るこの大著は、技術・戦術の解説に費やした分量が実に435頁、写真は423枚、プレイヤーの動きを示した図は255枚に及ぶ<sup>133)</sup>。とりわけ、基礎技術を説く部分では当時としては珍しい連続写真を多用し、読み手に彼が意図する運動技術への理解を促そうとする工夫が随所にみられる。

李想白は、同年の雑誌記事においても「近時籠球戦策余談」<sup>134)</sup>「籠球攻陣余談」<sup>135-137)</sup>「籠球競技概評」<sup>138)</sup>を次々と発表し、技術・戦術的な傾向に強い関心を示している。

同時期のバスケットボールの専門書としては、Meanwellの著作を翻訳した『籠球の原理』<sup>139)</sup>、大日本球技研究会が編んだ『籠球研究』<sup>140)</sup>、宮田覚造・折本寅太郎の『籠球競技の指導』<sup>141)</sup>をあげることができる。その他、大日本バスケットボール協会の設立を契機に同協会編集の『バスケットボール競技規則』<sup>142-147)</sup>

がほぼ毎年出版された。

この時代には、審判に関する研究も進展した。大日本バスケットボール協会の審判委員会は、審判技術の向上と判定基準の全国的統一をはかるべく、昭和7(1932)年に「第1回審判技術エキジビション会」なる研究会を開催している<sup>148)</sup>。

昭和6(1931)年、大日本バスケットボール協会の機関誌『籠球』が創刊される。李想白が同誌の創刊号～第6号までに連続的に寄稿したのは、「競技の精神」<sup>149)</sup>「アマチュアリズムについて」<sup>150)</sup>「スポーツと社会生活の本質」<sup>151)</sup>「戦闘精神とその純化」<sup>152)</sup>「勝敗に対する一つの見方」<sup>153)</sup>「チーム・プレーとその意義」<sup>154)</sup>といった、競技者の倫理観を問うような体育原理的な論稿であった。

『籠球』の創刊初期は、小林豊の「籠球試合後に於ける尿蛋白に就いて」<sup>155)</sup>、永井隆の「何故コンディションが悪かつたか」<sup>156)</sup>、岩田正道の「女子運動選手と月経」<sup>157)</sup>「女子運動競技者と月経に就て」<sup>158)</sup>など、医学的見地からの研究が目立って掲載されている。執筆者はいずれも医師である。関連して、バスケットボール選手には「鎖骨が削り取られる」という特異性があるとする研究成果が新聞紙面に発表されたこともあった<sup>159)</sup>。また、バスケットボールの競技歴を有する者は死亡率が高いとするアメリカの学説に対して、反論記事が掲載された一幕も確認される<sup>160)</sup>。

岸野は「『スポーツ』科学は歴史的にみて、『スポーツ』医学を基盤にして発展し国際化してきた科学である。」<sup>161)</sup>と指摘するが、これは取りも直さず日本のスポーツ科学史にも当てはまる傾向であった。すでに昭和2(1927)年には東京でスポーツ医学研究会が、大阪ではスポーツ医事協会が設立されている。なお、この時期には、キネシオロジー的な研究の萌芽が見られるという<sup>162)</sup>。

同じ頃、スポーツ専門雑誌には加治千三郎の「籠球の基礎に対する暗示」<sup>163)</sup>「籠球の基礎指導」<sup>164、165)</sup>など、技術的な関心は示されていたが、『籠球』誌においてゲームそのものに目が向けられるようになったのは、第3号(1932年)からである。とりわけ、鈴木俊平の「数字より見たるリーグ戦」<sup>166)</sup>や土肥冬男の「籠球試合の図表」<sup>167)</sup>からは、バスケットボールのゲームを数量化して理解しようとする従来にはない視点がみられる。これを、日本のバスケットボール研究におけるゲーム分析の嚆矢と見なしておきたい。その後も、同誌には阪勘造の「公式記録に現れたる数字の統計」<sup>168)</sup>、松本幸雄の「女子に於ける投射統計」<sup>169)</sup>、覚張一郎の「競技に関する統計的研究」<sup>170)</sup>、池上虎太郎の「数字よ

り見たるリーグ戦」<sup>171)</sup>、三浦鞞郎の「全国高等籠球大会に於るフアウルの統計」<sup>172)</sup>、李想白と池上虎太郎の「数字より見たる関東大学リーグ」<sup>173)</sup>「数字による関東大学リーグ戦」<sup>174)</sup>が相次いで寄稿され、数量的な見地からの研究データが蓄積されていく。こうして、『籠球』はバスケットボールの専門誌として、他誌とは一線を画した新展開を生み出していったといえよう<sup>注8)</sup>。

遡って昭和8(1933)年、大日本バスケットボール協会はアメリカの南カリフォルニア大学からGardnerとAndersonを招聘し、彼らを講師とする巡回指導を日本各地で実施した。これが一つの契機となって、日本のバスケットボール界に「システムプレー」を使った攻撃法が普及していく<sup>注9)</sup>。その意味で、巡回指導の内容をまとめて出版した『ガードナー籠球講習要録』<sup>175)</sup>には、当時の方向性を知る上で貴重な情報が盛り込まれているといえよう。各誌に寄稿された林公一<sup>注10)</sup>の「クリスクロス攻撃法」<sup>176)</sup>、宮崎正雄の「籠球指導セット、オフense」<sup>177)</sup>、竹内虎士の「籠球に於けるシステムプレイの考察」<sup>178-182)</sup>は、この流れを受けた研究であると見なすことができる。

また、昭和9(1934)年には松本幸雄編集のバスケットボール専門誌『籠球研究』が創刊の運びとなる。同誌は松本が翻訳したアメリカの文献を中心に掲載したもので、日本国内に最新のバスケットボール事情をいち早く持ち込む役割を果たした。そこには、競技規則や技術指導の解説も含まれているが、Lonborgの「ピヴォット・プレイ攻撃法とその防禦法」<sup>183)</sup>などをはじめ攻防の対峙関係を意識した誌面構成となっていたり、池田廣三郎の「シューティングの心理」<sup>184)</sup>など、当時としては珍しいバスケットボールを対象とした心理学的研究が盛り込まれている点に注目されたい。

同じく昭和9(1934)年、国立体育研究所による本邦初の体育研究誌『体育研究』が創刊される。同研究所で球技の研究に従事していた佐々木等は、バスケットボールの基礎技術にまつわる論稿「籠球の指導」<sup>185-189)</sup>を創刊号から連載した。とりわけ、佐々木のドリブル技術の研究は、当時の日本のボールやコート(屋外)の性能にまで注意が払われ、現場での実践を意識した叙述がなされている<sup>190)</sup>。

昭和10(1935)年、アメリカのオールスターチームが来日して招待試合が行われているが、その見聞から成る李想白の「日米競技所感」<sup>191)</sup>は、日米の比較を通じて当時の日本人の技術レベルを浮き彫りにした論稿である。



## 6. 1936～1944年のバスケットボール研究 —オリンピックベルリン大会参加と戦時体制 への突入—

昭和11（1936）年開催のオリンピックベルリン大会では、バスケットボールがはじめて正式種目に採用され、日本もナショナルチームを派遣することとなった。関連雑誌もオリンピックを意識した誌面構成で彩られ、『籠球』の第18号は「オリンピック号」と銘打たれている。結果は第9位（参加39カ国中）であったが、オリンピック出場という事実は、日本バスケットボール界にとって大きな足跡として刻まれた。

同じ頃、北村直躬の「籠球の練習についての医学的考察」<sup>192)</sup>、立花角五郎の「籠球医学談片」<sup>193)</sup>など、医学的な研究論文が『籠球』誌に複数投じられているが、当時のバスケットボールを含む競技スポーツ界は医学といよいよ強固な関係を結びつつあった。当時、日本でも運動生理学やスポーツ外傷の研究がにわかに活発化し、昭和7（1932）年のオリンピックロサンゼルス大会からは競技種目ごとに医師が役員として加わるようになり、ベルリン大会に合わせて開催された“International Congress of Sport Medicine”には日本の研究者も出席している<sup>194)</sup>。

当時のバスケットボール研究は、芦田伸三の「戦法より見たる加奈陀チーム」<sup>195)</sup>「速攻法の展開」<sup>196)</sup>、李性求の「戦法的見地よりの東亜競技大会」<sup>197)</sup>、元原利一の「バスケットボールアウトオブバウンズプレイ」<sup>198)</sup>「フリースローに於ける競技者の配置」<sup>199)</sup>、竹崎道雄の「地域防御に対する攻撃法」<sup>200)</sup>といった戦術研究と合わせて、畑龍雄の「関東大学リーグ戦を数字より見る」<sup>201)</sup>、都新聞社の「数字より見たる関東大学リーグ戦」<sup>202)</sup>など、統計データの蓄積も引き続き進められていた。

また、基礎技術に立ち返り、その練習法に光が当てられたのもこの時代の特徴である。大橋貞雄の「僕の籠球日記より」<sup>203)</sup>、芦田伸三の「小学校指導者講習会雑感」<sup>204)</sup>、吉井四郎の「バスケットボール『基礎技術』私見」<sup>205)</sup>、林公一の「攻撃の練習法に就いて」<sup>206)</sup>、佐藤儀平の「初級中級者における籠球基礎技術の指導法」<sup>207-209)</sup>、西本正一の「ドリブル覚え書」<sup>210)</sup>といった諸研究がこれに該当する。国立体育研究所においても、佐々木等の「籠球自由投練習曲線に就て」<sup>211)</sup>など、練習法の研究が進展を見せていた。このほか、佐々木は『学校球技』<sup>212)</sup>『競技運動各論』<sup>213)</sup>においてバスケットボールの指導法を取り上げている。

1930年代末になると、昭和12（1937）年の日中戦争

勃発を契機に日本は戦時体制に突入する。戦時下にあつては、国民の体力の向上が当面の課題として取り上げられ、スポーツ競技の実施はそれに支障のない範囲に限定されることとなった。昭和13（1938）年、「国民体力の国家管理の中核」<sup>214)</sup>として厚生省が新設される。昭和14（1939）年には厚生省体力局によって体力章検定がはじまり、総力戦体制下における全国規模での体力の具体的指標となった。昭和16（1941）年、第12回明治神宮国民体育大会の出場選手資格が体力章検定合格者に限られるなど<sup>215)</sup>、バスケットボールとも無関係ではなかった。吉田章信の『日本人の体力』<sup>216)</sup>は、日本人の体力低下を警告した研究として知られている。

ところで、厚生省体力局は国民の体力向上のために全国各地のスポーツ施設の調査研究に乗り出し、その成果を『体力向上施設参考資料』<sup>217)</sup>『武道場及體育館』<sup>218)</sup>『体力向上施設調』<sup>219)</sup>として編集している。これによって、バスケットボールをプレイできる施設の設置状況が明らかとなった<sup>211)</sup>。

当時のバスケットボール関係者を悩ませていたのは、物資の節約問題である。昭和13（1938）年、バスケットボールを含む7団体は、全国の関係下部団体に対して物資（特に皮革）の使用制限に係る通達を出している<sup>220)</sup>。これを受けて、『籠球』誌にも鈴木重武の「物資の愛護に就いて」<sup>221)</sup>、李想白の「儉にして余りあれ物資節約問題とスポーツ」<sup>222)</sup>、妹尾堅吉の「統制運動用具の配給に就いて」<sup>223)</sup>など、時勢を捉えた話題が寄稿されるところとなった。こうした時局下にあつて、大日本バスケットボール協会主導で「日本製球をオリンピック競技使用球とするために必要な研究」<sup>224)</sup>が進められていたことは特筆しておきたい。

昭和16（1941）年、大日本バスケットボール協会は大日本籠球協会に改称され、さらに昭和17（1942）年には大日本体育協会が政府の外郭団体（大日本体育会）になったことにともない、バスケットボールも同会の「籠球部会」として国家の管理下におかれた。同年、全日本選手権は中止に追い込まれ、昭和19（1944）年には籠球部会理事会で学生のバスケットボール競技の禁止が決定している。

こうして、日本のバスケットボール界の近代史は、戦火の煽りを受けてあえなく終焉を迎えることとなった。

## 7. 結び

本稿は、日本におけるバスケットボール研究の学問

体系を把握する試みの一環として、近代日本のバスケットボールにまつわる研究が何を対象としてどのように行われてきたのかを時系列で検討するものであった。その結果は、以下のように整理することができる。

1. Naismith が考案したバスケットボールを明治期の日本に最初に伝えたのは大森兵蔵であったが、日本人に受容せしめられたのは成瀬仁蔵がアメリカから持ち込んだ女子バスケットボールの方であった。当時のバスケットボール研究は女子競技としての教材研究に終始している段階にあった。
2. 大正期に入ると、女子バスケットボールが学校教材に採用され、関連の教材研究が引き続き行われた。一方、Brown の来日を契機に日本人は本格的なバスケットボールに触れはじめた。また、スポーツの科学的研究が萌芽したことで、バスケットボール研究が後代に活発化する素地が作り上げられていった。
3. 大正末期、日本人にバスケットボールが普及して全日本選手権が開催されはじめた頃、本格的な専門書が相次いで刊行されるようになった。また、当時創刊のスポーツ専門雑誌に投じられたバスケットボールの記事は、はじめは競技の紹介、規則の解説、大会記録、戦評に終始していたが、やがて技術・戦術面、競技規則への対応、審判法、倫理的側面の研究成果が目立つに至った。さらに、スポーツ施設の研究が進展すると、その中でバスケットボールの項目が取り上げられた。
4. 大日本バスケットボール協会が設立された頃、李想白を中心にバスケットボールの研究が蓄積されていた。同協会の機関誌『籠球』の創刊当初は、体育原理や医学的な研究が大半を占めたが、やがてバスケットボールを数量化して理解しようとするゲーム分析の先駆的な研究が登場する。また、Gardner らの全国的な指導者講習会の内容を受けた戦術研究も取り組まれている。さらに、松本幸雄編集の『籠球研究』誌によってアメリカの最新バスケットボール事情がいち早く持ち込まれるようになった。
5. オリンピックベルリン大会への参加を果たした日本のバスケットボール界は、医学的な研究との関係性を一層強めていった。また、戦術研究や統計データの蓄積も引き続き進められ、基礎技術に立ち返った指導法の研究も活発化した。しかし、日中戦争の勃発を契機に日本のスポーツ界の目標が国民体力の向上に傾いていくと、バスケットボールの研究も国策と関わる施設・設備的な研究を除いて停滞の一途を辿り、専門誌への寄稿内容も時局下の物資の節約

問題が主になっていった。

以上より、近代日本におけるバスケットボール研究は、その時々々の学問の動向や競技の普及状況、社会背景に影響を受けて多様に分化しながら、今日に連なる下地を作り上げていったと結ぶことができよう。

### 〈 注 〉

注1) ここでいう「バスケットボール学」とは、バスケットボールを対象とする個別研究の寄せ集めではなく、総合科学として捉えていこうとする意味合いが込められている。したがって、今ここで仮に、この暫定的な学問名称に英訳を当てはめてみるならば、“Basketball Science”などと単数で表記することになる。

注2) ここでいう「学問」とは、「一定の理論に基づいて体系化された知識と方法。」(新村出編(2008)学問。広辞苑 第六版。岩波書店、p.503)のことを指す。

注3) 本稿における「スポーツ科学」とは、以下の定義に基づいている。

「一般的には、スポーツ哲学、スポーツ教育学、スポーツ史学、スポーツ心理学、スポーツ社会学、スポーツ経営学、スポーツ施設学、スポーツ法学、スポーツ運動学、バイオメカニクス、スポーツ医学、スポーツ生理学、スポーツ衛生学などの諸領域からなる学際科学であり、方法的には複数の専門諸学を駆使して運動遊戯から競技スポーツにいたる〈スポーツ運動〉現象を総合的に研究する科学であるとみなされている。」(岸野雄三・谷釜了正(1987)スポーツ科学。日本体育協会監、最新スポーツ大事典。大修館書店、p.536)

注4) スポーツ科学の研究史に関連して、岸野の次の見解を引いておきたい。

「学説史の研究が分化すればするほど、それは後学の研究者に示唆するところも大きいですが、それだけに、この面の研究には専門知識を必要とし、専門研究者でないで学説史の研究も困難になるといった特殊事情も生じてくる。しかし研究史は専門的に分化すると同時に、巨視的な側面からも研究され、学問史上に位置づけることも必要になってくる。したがって、今日われわれの試みる学説史的研究も、その研究の分化と対比的に総合的考察も必要となってくる。」(岸野雄三(1973)体育史：体育史学への試論。大修館書店、p.103)

注5) Naismith が「バスケットボールが、創案後まもなく、日本に伝えられたのはまちがいないことだが、一九一三年(大正二)ごろまでは、男子のスポーツとは、みなされていないようだ。」(ネイスミス：水谷豊訳(1980)バスケットボール：その起源と発展。日本YMCA 同盟出版部、p.202)と述べるように、日本人は女子競技としてバスケットボールを受容した。ただし、成瀬の手によるバスケットボールとは、彼がアメリカで触れたNaismith 考案のバスケットボールを女子用に改良した競技を基にしているため、現行競技に



連なる意味でのバスケットボールそのものを日本で最初に正確に紹介した人物は、やはり大森兵蔵とすべきである。

- 注6) 成瀬の教材研究の足跡や体育観については、彼の著「女子教育」(成瀬仁蔵著作集編集委員会編(1974)女子教育. 成瀬仁蔵著作集 第1巻. 日本女子大学)や成瀬の人物思想史を描いた馬場の研究(馬場哲雄(2014)近代女子高等教育機関における体育・スポーツの原風景:成瀬仁蔵の思想と日本女子大学校に原型をもとめて. 翰林書房)などに詳しい。
- 注7) 同年刊行された三橋義雄の『女子競技』は、バスケットボールに特化した書籍ではなかったが、そこには200頁を超える紙幅を割いてバスケットボール競技が紹介されている。質量ともに、当時のバスケットボールの単行書に比肩し得る貴重な文献として位置づけておきたい(三橋義雄(1924)バスケットボール. 女子競技. 廣文堂書店, pp.403-615)。
- 注8) 他誌に掲載された数量的な把握として、宮崎正雄の論稿がある(宮崎正雄(1935)籠球競技の計数的考察. 体育と競技, 14(1):24-29.)。
- 注9) 及川によれば、Gardner 来日以前より「システム」を使った攻撃法は李想白によって日本に紹介されていたけれども、実際に「システムプレー」という言葉が日本人の間に普及し受け容れられた画期は、やはりGardnerの講習会にあったと指摘している(及川佑介(2011)松本幸雄と『籠球研究』(昭和9~11年):日本バスケットボール史の一齣. 叢文社, pp.139-145)。
- 注10) この「林公一」とは、松本幸雄のペンネームであったことが確認されている(及川佑介(2011)松本幸雄と『籠球研究』(昭和9~11年):日本バスケットボール史の一齣. 叢文社, p.44)。
- 注11) この手の調査研究は、すでに昭和9(1934)年に文部省主導で実施されており、日本全国のバスケットボール競技が実施可能な施設の設置状況が明らかにされていた(文部大臣官房体育課(1934)本邦一般社会ニ於ケル主ナル体育運動場調. 文部大臣官房体育課)。

## (文 献)

- 1) 立花隆(1999)ほくはこんな本を読んできた. 文藝春秋, p.77
- 2) 福井憲彦(2006)歴史学入門. 岩波書店, p.11
- 3) 関四郎・松浦義行・岩本良裕・波多野義郎・峯村昭三・石村宇佐一・梅ヶ枝健一(1984)バスケットボールの科学. 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編, 現代体育・スポーツ大系 第26巻. 講談社, pp.136-152
- 4) 内山治樹・加藤敏弘(1985)日本におけるバスケットボール研究の動向に関する一考察:スポーツ教材としての地平から. 埼玉大学紀要 教育科学, 34(3):107-123.
- 5) 佐々木三男(2000)バスケットボール競技における研究成果と指導現場の関連について. 21世紀と体育・スポーツ科学の発展 第2巻. 杏林書院, pp.82-88
- 6) 体育原理研究会編(1972)体育学研究の分化と総合. 不昧堂出版
- 7) 加藤橋夫(1957)体育研究の歴史. 日本体育学会編,

- 体育学研究法. 体育の科学社, pp.1-13
- 8) 辰沼広吉・依田隆也(1972)日本におけるスポーツ科学の発端と現況. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 11(1):13-17.
  - 9) 前川峯雄・片岡睦夫(1972)日本における体育学研究の発展. 前川峯雄・猪飼道夫ほか編著, 現代体育学研究法. 大修館書店, pp.40-51
  - 10) 岸野雄三(1972)学問の分化と総合. 体育原理研究会編, 体育学研究の分化と総合:体育の原理 第7号. 不昧堂出版, pp.37-48
  - 11) 岸野雄三(1974)スポーツ科学とスポーツ史. 体育学研究, 19(4・5):167-174.
  - 12) 岸野雄三(1977)スポーツ科学とは何か. 朝比奈一男・水野忠文・岸野雄三編著, スポーツの科学的原理. 大修館書店, pp.77-133
  - 13) 岸野雄三・谷釜了正(1987)スポーツ科学. 日本体育協会監, 最新スポーツ大事典. 大修館書店, pp.536-540
  - 14) 樋口聡(1995)スポーツ科学論序説(II)イメージの生成:わが国におけるスポーツ科学の誕生. 広島大学教育学部紀要 第二部, (44):113-123.
  - 15) 高橋幸一(2015)スポーツ科学の誕生と発展. 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編, 21世紀スポーツ大事典. 大修館書店, pp.218-220
  - 16) 日本体育協会編(1958)スポーツ八十年史. 日本体育協会, p.283
  - 17) 日本バスケットボール協会編(1981)バスケットボールの歩み:日本バスケットボール協会50年史. 日本バスケットボール協会, p.42
  - 18) 水谷豊(2011)バスケットボール物語. 大修館書店, p.105
  - 19) 斉藤実(1980)東京キリスト教青年会百年史. 東京キリスト教青年会, p.145
  - 20) 水谷豊(1982)バスケットボールの歴史に関する一考察(Ⅷ):大森兵蔵略伝. 青山学院大学一般教育部会論集, (23):179-180.
  - 21) 水谷豊(2011)バスケットボール物語. 大修館書店, pp.106-107
  - 22) 輿水はる海(1968)女子バスケットボールに関する研究(2). お茶の水女子大学人文学紀要, (31):92.
  - 23) 谷釜了正(1978)「球籠遊戯」から「バスケット, ボール」へ:大正3年以前のバスケットボール導入過程の一考察. 日本体育大学紀要, (7):1-11.
  - 24) 小野泉太郎(1902)毬籠. 日本婦人, (31):20-22.
  - 25) 佐竹郭公(1902)女学生と「バスケットボール」(毬籠). 女学世界, 2(9):110-116.
  - 26) 日本体育会編(1903)バスケット, ボール. 新撰遊戯法. 育英舎, pp.71-75
  - 27) 白井規矩郎(1903)Basket Ball. 婦人界, 2(4):144-150.
  - 28) 白井規矩郎(1910)バスケット, ボール. 体操と遊戯の時間. 啓成社, pp.818-837
  - 29) 松浦政泰(1905)女子遊戯バスケット, ボール(籠遊戯). 女学世界, 5(12):161-166.
  - 30) 川井和磨編(1901)籠毬. 実験新体操遊戯. 秀英舎, pp.6-8
  - 31) 佐々木亀太郎・高橋忠次郎(1903)バスケットボール.

- 競争遊戯最新運動法. 藜光堂, pp.51-53
- 32) 高橋忠次郎・松浦政泰 (1909) バスケット, ボール. 家庭遊戯法. 博文館, pp.170-176
- 33) 坪井玄道・可児徳 (1909) バスケットボール. 小学校運動遊戯. 大日本図書, pp.94-101
- 34) 晴光館編集部編 (1910) バスケットボール. 現代娯楽全集. 晴光館, p.998
- 35) 上原鹿之助編 (1910) バスケットボール. 実験ボール遊技三十種. 平本健康堂, pp.21-28
- 36) 渡辺誠之 (1912) 競技的バスケット, ボール. 最新ボール遊戯法. 研文館, pp.185-216
- 37) 高橋忠次郎 (1904) 籠球競技. 榊原文盛堂
- 38) 高橋忠次郎 (1904) 籠球競技. 榊原文盛堂, p.9
- 39) (1907) 今の女學生の体育. 読売新聞, 明治40年4月23日 (朝刊)
- 40) 加藤橘夫 (1957) 体育研究の歴史. 日本体育学会編, 体育学研究法. 体育の科学社, p.10
- 41) 開発社編 (1913) 学校体操教授要目: 文部省制定. 開発者, p.15
- 42) 佐川永三郎 (1913) バスケットボール. 体操教授要目に準拠したる新定遊戯. 健康堂体育店, p.76
- 43) 国民教育研究会編 (1913) 最新小学校遊戯解説: 学校体操教授要目準拠. 東京出版社. pp.51-52
- 44) 日本バスケットボール協会編 (1981) バスケットボールの歩み: 日本バスケットボール協会50年史. 日本バスケットボール協会, p.43
- 45) 水谷豊 (2011) バスケットボール物語. 大修館書店, p.116
- 46) 極東体育協会編・佐藤金一訳 (1917) バスケット, ボール規定. 極東体育協会
- 47) 平本直次 (1917) バスケットボール. オリンピック競技法. 健康堂, pp.1-13
- 48) 吉田章信 (1916) 運動生理学. 南江堂書店
- 49) 野口源三郎 (1918) オリムピック競技の実際. 大日本体育協会出版部
- 50) 岸野雄三 (1973) 体育史: 体育史学への試論. 大修館書店, p.103
- 51) 日本体力医学会編 (1964) 日本におけるスポーツ医学研究. 明治生命厚生事業団, p.9
- 52) 前川峯雄・片岡睦夫 (1972) 日本における体育学研究の発展. 前川峯雄・猪飼道夫ほか編著, 現代体育学研究法. 大修館書店, p.43
- 53) 体育研究所編 (1927) 体育研究所概要 第二版. 体育研究所, pp.19-34
- 54) 増田健三 (1921) 女子バスケットボール規定. 水野利八
- 55) 大日本体育協会編 (1923) バスケットボール規定 1923年改定. 大日本体育協会
- 56) 藤山快隆 (1924) バスケットボール. 目黒書店
- 57) Wardraw., and Morrison. (1922) Basket ball. Charles Scribner's
- 58) 荒木直範 (1924) 最新バスケットボール術. 美満津商店
- 59) 鈴木精一 (1925) バスケットボール. 教文書院
- 60) 三橋義雄 (1926) バスケットボール. 廣文堂
- 61) 三橋義雄 (1926) 最も要領を得たるバスケットボール: 階段的指導法と最新規則の解説. 木下製作所出版部
- 62) 外山慎作 (1926) バスケットボール法大要. 外山慎作
- 63) 鈴木重武 (1928) 籠球コーチ. 矢来書房
- 64) バスケットボール研究会編 (1928) 籠球必携. 東京運動社
- 65) 小瀬峰洋 (1929) 籠球競技. 教文書院
- 66) 安川伊三 (1929) 籠球競技法. 目黒書店
- 67) 石橋蔵五郎 (1919) バスケットボール. 新体育, 1 (4): 61-64.
- 68) 近藤茂吉 (1921) バレーボールとバスケットボール. 運動界, 2 (4): 62-65.
- 69) (1921) バスケットボール. 運動界, 2 (6): 54.
- 70) 荒木直範 (1922) バスケットボール講話 (一). ATHLETICS, 1 (6): 14-19.
- 71) 荒木直範 (1922) バスケットボール講話 (二). ATHLETICS, 1 (7): 14-21.
- 72) 荒木直範 (1922) バスケットボール講話 (三). ATHLETICS, 1 (8): 23-28.
- 73) 荒木直範 (1922) バスケットボール講話 (四). ATHLETICS, 1 (9): 22-29.
- 74) 山本芳松 (1922) 女子のバスケットボール競技. 体育と競技, 1 (9): 74-77.
- 75) ワイ・アイ生 (1924) 女子バスケットボール. 体育と競技, 3 (12): 85-93.
- 76) ワイ・アイ生 (1925) 女子バスケットボール. 体育と競技, 4 (1): 60-70.
- 77) ワイ・アイ生 (1925) 女子バスケットボール. 体育と競技, 4 (2): 74-81.
- 78) ワイ・アイ生 (1925) 女子バスケットボール (続き). 体育と競技, 4 (2): 63-72.
- 79) ワイ・アイ生 (1925) 女子バスケットボール (続). 体育と競技, 4 (3): 44-52.
- 80) 西村正次 (1924) バスケットボール規定の変更. 体育と競技, 3 (3): 75-77.
- 81) 村山正明 (1925) バスケットボール規則及罰則の説明. 体育と競技, 4 (5): 63-72.
- 82) 桐翠倶楽部 (1925) バスケットボール規定の抜粋. 体育と競技, 4 (10): 66-70.
- 83) 金栗生 (1922) 極東競技大会雑感. 体育と競技, 2 (8): 80-82.
- 84) 荒木直範 (1922) バスケットバレーボール大会印象記. ATHLETICS, 1 (5): 35-39.
- 85) 西村正次 (1923) 極東大会とバスケットボール競技. ATHLETICS, 2 (5): 43-45.
- 86) 荒木直範 (1923) バスケットヴァアレイボールの戦跡: 此の両球技の普及を図れ. ATHLETICS, 2 (7): 142-147.
- 87) 金栗生 (1923) 極東競技大会雑感. 体育と競技, 2 (8): 80-82.
- 88) 薬師寺尊正 (1925) バスケットボール・ゲームを観る (上). ATHLETICS, 3 (2): 85-95.
- 89) 鈴木重武 (1926) 防御法の研究. 運動界, 8 (1): 25-28.
- 90) 鈴木重武 (1926) 防御法の研究. 運動界, 8 (2): 35-40.
- 91) 鈴木重武 (1926) 防御法の研究. 運動界, 8 (3):

- 21-24.
- 92) 元原利一 (1926) バスケットボールアウトオブバウンズプレイ. 体育と競技, 5 (6): 81-86.
- 93) 元原利一 (1927) 平均配置からのティップオフ・プレイ. 体育と競技, 6 (5): 64-70.
- 94) 安川伊三 (1927) バスケット・シューティング. 体育と競技, 6 (2): 75-79.
- 95) 安川伊三 (1927) バスケット・シューティング (続). 体育と競技, 6 (3): 45-53.
- 96) 安川伊三 (1927) バスケット・シューティング. 体育と競技, 6 (5): 53-64.
- 97) 李想白 (1928) ドリブルの制限について (一): バスケットボールの重要な規則改正. 運動界, 9 (7): 11-14.
- 98) 李想白 (1928) ドリブルの制限について (二): バスケットボールの重要な規則改正. 運動界, 9 (8): 6-10.
- 99) 李想白 (1928) 籠球審判の心得について. 運動界, 9 (10): 6-9.
- 100) 李想白 (1928) 籠球審判の心得について (続): ダブル・レフエリー・システム. 運動界, 9 (11): 18-21.
- 101) 安川伊三 (1927) バスケットボール審判法. 体育と競技, 6 (11): 65-73.
- 102) 安川伊三 (1927) バスケットボール審判法. 体育と競技, 6 (12): 53-59.
- 103) 安川伊三 (1928) バスケットボール審判法. 体育と競技, 7 (1): 83-88.
- 104) 長田博訳 (1928) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 7 (2): 82-99.
- 105) 長田博訳 (1928) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 7 (3): 49-62.
- 106) 長田博訳 (1928) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 7 (4): 70-74.
- 107) 長田博訳 (1928) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 7 (8): 70-74.
- 108) 長田博訳 (1928) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 7 (10): 74-79.
- 109) 長田博訳 (1928) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 7 (12): 76-79.
- 110) 長田博訳 (1929) バスケットボール誌上コーチ. 体育と競技, 8 (1): 74-78.
- 111) 加治千三朗 (1929) 籠球の律動的指導に就いて (其の一). 体育と競技, 8 (11): 76-81.
- 112) 加治千三朗 (1929) 籠球の律動的指導に就いて (其の二). 体育と競技, 8 (12): 60-63.
- 113) 中島海 (1929) 籠球基本練習の指導. 教育研究, (337): 235-241.
- 114) 李想白 (1929) 籠球に於けるスポーツマンシップ. 運動界, 10 (5): 19-23.
- 115) 鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (一). ATHLETICS, 7 (3): 30-34.
- 116) 鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (二). ATHLETICS, 7 (5): 59-65.
- 117) 鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (三). ATHLETICS, 7 (6): 30-33.
- 118) 鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (四). ATHLETICS, 7 (10): 12-18.
- 119) 鈴木重武 (1929) 攻撃システムの研究 (五). ATHLETICS, 7 (11): 16-20.
- 120) 佐々木等 (1929) ボールの内圧に就て. 体育研究会々誌 第1回. 山海堂編集所, pp.27-29
- 121) 文部省編 (1927) 運動競技場要覧. 日本体育聯盟, pp.27-31
- 122) 相川要一 (1928) 運動遊戯設備. 雄山閣, pp.47-50
- 123) 進藤孝三 (1928) 理想の体育設備と用具設計並に其の解説. 文書堂, p.93
- 124) 谷釜尋徳 (2009) 日本におけるバスケットボールの競技場に関する史的考察: 大正期~昭和20年代の屋外コートの実際に着目して. スポーツ健康科学紀要, (6): 21-26.
- 125) 安田弘嗣 (1930) 運動の施設経営. 一成社, pp.22-28
- 126) 大屋靈城 (1930) 計画・設計・施工公園及運動場. 裳華房, pp.499-501
- 127) 文部省編 (1932) 現代体育の施設と管理. 日黒書店, pp.111-120
- 128) 早川良吉 (1932) 体育館の計画指針. 籠球, (5): 6-19.
- 129) ルーブル: 鶴岡英吉訳 (1928) 競技者の心理学的研究. 体育と競技, 7 (8): 33-41.
- 130) 今村嘉雄 (1928) 競技の心理学的根拠並社会的価値. 体育と競技, 7 (8): 60-63.
- 131) 李想白 (1930) 指導籠球の理論と実際. 春陽堂
- 132) 及川佑介 (2011) 松本幸雄と『籠球研究』(昭和9~11年): 日本バスケットボール史の一齣. 叢文社, p.126
- 133) 及川佑介 (2011) 松本幸雄と『籠球研究』(昭和9~11年): 日本バスケットボール史の一齣. 叢文社, p.127
- 134) 李想白 (1930) 近時籠球戦策余談 (其の一). 運動界, 11 (1): 97-100.
- 135) 李想白 (1930) 籠球攻陣余談: リーグ・ゲームに現はれた攻撃陣形について. 運動界, 11 (2): 14-17.
- 136) 李想白 (1930) 籠球攻陣余談 (其の二): リーグ戦に現れた攻撃陣形に就て. 運動界, 11 (3): 20-23.
- 137) 李想白 (1930) 籠球攻陣余談 (其の三): リーグ戦に現はれた攻撃陣形に就て. 運動界, 11 (4): 14-17.
- 138) 李想白 (1930) 籠球競技概評技術方面より見たる (1). 運動界, 11 (7): 148-154.
- 139) ミーンウェル: 星野隆英・柳田享訳 (1931) 籠球の原理. 三省堂
- 140) 大日本球技研究会編 (1934) 籠球研究. 一成社
- 141) 宮田覚造・折本寅太郎 (1935) 籠球競技の指導. 日本体育学会
- 142) 大日本バスケットボール協会編 (1930) バスケットボール競技規則 昭和五年度. 大日本バスケットボール協会
- 143) 大日本バスケットボール協会編 (1930) バスケットボール競技規則 昭和六年度. 大日本バスケットボール協会
- 144) 大日本バスケットボール協会編 (1932) バスケットボール競技規則 昭和八年度. 大日本バスケットボール協会
- 145) 大日本バスケットボール協会編 (1933) バスケット



- ボール競技規則 昭和八・九年度. 大日本バスケットボール協会
- 146) 大日本バスケットボール協会編 (1934) バスケットボール競技規則 昭和九・十年度. 大日本バスケットボール協会
- 147) 大日本バスケットボール協会・坂勘造編 (1935) バスケットボール競技規則 昭和十・十一年度. 大日本バスケットボール協会
- 148) (1932) 審判技術の研究會 籠球協会の新試み. 読売新聞, 昭和7年5月13日付 (朝刊)
- 149) 李想白 (1931) 競技の精神. 籠球, (1): 8-10
- 150) 李想白 (1931) アマチュアリズムについて. 籠球, (2): 4-14.
- 151) 李想白 (1932) スポーツと社会生活の本質. 籠球, (3): 4-9.
- 152) 李想白 (1932) 戦闘精神とその純化. 籠球, (4): 2-5.
- 153) 李想白 (1932) 勝敗に対する一つの見方. 籠球, (5): 2-5.
- 154) 李想白 (1933) ティーム・プレーとその意義. 籠球, (6): 2-5.
- 155) 小林豊 (1931) 籠球試合後に於ける尿蛋白に就いて. 籠球, (2): 17-23.
- 156) 永井隆 (1931) 何故コンディションが悪かつたか. 籠球, (2): 23-27.
- 157) 岩田正道 (1932) 女子運動選手と月経. 籠球, (3): 10-11.
- 158) 岩田正道 (1932) 女子運動競技者と月経に就て. 籠球, (4): 6-14.
- 159) (1934) 鎖骨が削り取られる: 籠球選手の特異性. 読売新聞, 昭和9年2月24日付 (朝刊)
- 160) 李想白 (1932) 籠球は危険ではない 死亡率も極少い. 読売新聞, 昭和7年3月1日付 (朝刊)
- 161) 岸野雄三 (1974) スポーツ科学とスポーツ史. 体育学研究, 19 (4・5): 170.
- 162) 前川峯雄・片岡睦夫 (1972) 日本における体育学研究の発展. 前川峯雄・猪飼道夫ほか編著, 現代体育学研究法. 大修館書店, p.47
- 163) 加治千三朗 (1931) 籠球の基礎に対する暗示. 体育と競技, 10 (1): 46-48.
- 164) 加治千三朗 (1931) 籠球の基礎指導. 体育と競技, 10 (2): 58-62.
- 165) 加治千三朗 (1931) 籠球の基礎指導. 体育と競技, 10 (3): 58-62.
- 166) 鈴木俊平 (1932) 数字より見たるリーグ戦. 籠球, (3): 20-27.
- 167) 土肥冬男 (1932) 籠球試合の図表. 籠球, (3): 63-65.
- 168) 阪勘造 (1933) 公式記録に現れたる数字の統計. 籠球, (6): 17-23.
- 169) 松本幸雄 (1933) 女子に於ける投射統計. 籠球, (6): 24-27.
- 170) 覚張一郎 (1933) 競技に関する統計的研究. 籠球, (8): 26-29.
- 171) 池上虎太郎 (1934) 数字より見たるリーグ戦. 籠球, (9): 40-47.
- 172) 三浦勲郎 (1935) 全国高等籠球大会に於るフアウルの統計. 籠球, (11): 28-30.
- 173) 李想白・池上虎太郎 (1935) 数字より見たる関東大学リーグ. 籠球, (11): 68-74.
- 174) 李想白・池上虎太郎 (1935) 数字による関東大学リーグ戦. 籠球, (15): 86-93.
- 175) 大日本バスケットボール協会編 (1933) ガードナー 籠球講習要録. 動文社
- 176) 林公一 (1934) クリスクロス攻撃法. 籠球, (9): 32-39.
- 177) 宮崎正雄 (1935) 籠球指導セット, オフェンス (1). 体育と競技, 14 (5): 61-66.
- 178) 竹内虎士 (1935) 籠球に於けるシステムプレイの考察: 特に偶発法との価値の比較に就て. 体育と競技, 14 (5): 17-22.
- 179) 竹内虎士 (1935) 籠球に於けるシステムプレイの考察: 特に偶発法との価値の比較に就て. 体育と競技, 14 (6): 32-63.
- 180) 竹内虎士 (1935) 籠球に於けるシステムプレイの考察. 体育と競技, 14 (7): 22-25.
- 181) 竹内虎士 (1935) 籠球に於けるシステムプレイの考察 (続). 体育と競技, 14 (8): 81-88.
- 182) 竹内虎士 (1935) 籠球に於けるシステムプレイの考察 (完). 体育と競技, 14 (9): 22-29.
- 183) ロンボーク: 松本幸雄訳 (1935) ビヴォット・プレイ攻撃法とその防禦法. 籠球研究, (4): 3-7.
- 184) 池田廣三郎 (1936) 籠球心理: シューティングの心理. 籠球研究, (8): 22-24.
- 185) 佐々木等 (1934) 籠球の指導. 体育研究, 1 (1): 106-111.
- 186) 佐々木等 (1934) 籠球の指導 (二). 体育研究, 1 (3): 80-87.
- 187) 佐々木等 (1934) 籠球の指導 (三). 体育研究, 1 (4): 62-69.
- 188) 佐々木等 (1934) 籠球の指導 (四). 体育研究, 1 (5): 112-117.
- 189) 佐々木等 (1934) 籠球の指導 (五). 体育研究, 1 (6): 61-63.
- 190) 佐々木等 (1934) 籠球の指導 (二). 体育研究, 1 (3): 86.
- 191) 李想白 (1935) 日米競技所感: 技術方面を中心として. 籠球, (13): 3-27.
- 192) 北村直躬 (1936) 籠球の練習についての医学的考察. 籠球, (16): 2-3.
- 193) 立花角五郎 (1936) 籠球医学談片. 籠球, (18): 108-110.
- 194) 日本体力医学会編 (1964) 日本におけるスポーツ医学研究. 明治生命厚生事業団, pp.10-11
- 195) 芦田伸三 (1939) 戦法より見たる加奈陀チーム: 馬蹄型攻撃法に就いて. 籠球, (24): 3-7.
- 196) 芦田伸三 (1940) 速攻法の展開. 籠球, (25・26): 71-72.
- 197) 李性求 (1940) 戦法的見地よりの東亜競技大会. 籠球, (27・28): 48-56.
- 198) 元原利一 (1940) バスケットボールアウトオブバウンズプレイ. 体育と競技, 19 (6): 81-86.

- 199) 元原利一 (1940) フリースローに於ける競技者の配置. 体育と競技, 19 (12) : 57-60.
- 200) 竹崎道雄 (1941) 地域防御に対する攻撃法. 籠球, (32) : 17-24.
- 201) 畑龍雄 (1938) 関東大学リーグ戦を数字より見る. 籠球, (21) : 17-25.
- 202) 都新聞社 (1940) 数字より見たる関東大学リーグ戦. 籠球, (25・26) : 66-71.
- 203) 大橋貞雄 (1936) 僕の籠球日記より. 籠球, (16) : 4-8.
- 204) 芦田伸三 (1937) 小学校指導者講習会雑感. 籠球, (20) : 73-76.
- 205) 吉井四郎 (1940) バスケットボール「基礎技術」私見. 大塚学友会籠球部部報, (12) : 40-63.
- 206) 林公一 (1938) 攻撃の練習法に就いて. 籠球, (21) : 4-11.
- 207) 佐藤儀平 (1939) 初級中級者に於ける籠球基礎技術の指導法 (一). 体育と競技, 18 (9) : 76-82.
- 208) 佐藤儀平 (1939) 初級中級者に於ける籠球基礎技術の指導法 (二). 体育と競技, 18 (10) : 52-58.
- 209) 佐藤儀平 (1939) 初級中級者に於ける籠球基礎技術の指導法 (三). 体育と競技, 18 (12) : 112-119.
- 210) 西本正一 (1941) ドリブル覚え書: 初心者の為に. 籠球, (31) : 44-46.
- 211) 佐々木等 (1937) 籠球自由投練習曲線に就て. 体育研究所概要 第1巻. 体育研究所, pp.155-156
- 212) 佐々木等 (1937) 学校球技. 目黒書店. pp.170-239
- 213) 佐々木等 (1937) 籠球. 競技運動各論 下巻. 建文館, pp.1-26
- 214) 木下秀明 (1970) スポーツの近代日本史. 杏林書院, p.212
- 215) 岸野雄三ほか編 (1999) 近代体育スポーツ年表 三訂版. 大修館書店, p.174
- 216) 吉田章信 (1939) 日本人の体力. 藤井書店
- 217) 厚生省体力局編 (1938) 体力向上施設参考資料 第四輯 運動場及運動公園. 厚生省体力局, pp.71-74
- 218) 厚生省体力局編 (1939) 武道場及體育館. 厚生省体力局
- 219) 厚生省体力局編 (1940) 武道及體育館一覧表. 体力向上施設調. 厚生省体力局
- 220) 日本体育協会編 (1963) 日本体育協会五十年史. 日本体育協会, p.177
- 221) 鈴木重武 (1938) 物資の愛護に就いて. 籠球, (22) : 31-33.
- 222) 李想白 (1938) 儉にして余りあれ物資節約問題とスポーツ. 籠球, (22) : 28-30.
- 223) 妹尾堅吉 (1941) 統制運動用具の配給に就いて. 籠球, (31) : 49-52.
- 224) 鈴木重武 (1938) 規格委員会報告. 籠球, (22) : 84-85.